

横浜国立大学中央広場+経済学部講義棟2号館

常盤台キャンパス中央に位置する広場と、隣接する講義棟の改修計画である。ふたつのプロジェクトを通し、これまで個別に利用されていた中央広場周辺の建築群や外部空間を一つのまとまりある環境として改めて認識づけ、キャンパスの個性である緑豊かな環境をより身近に感じ、誰でも気兼ねなく滞在できるパブリックスペースとして開放することを考えた。

約40年が経過した中央広場は、植物生態学者・宮脇昭名誉教授の構想による手付かずの森に囲まれ、求心性の強い放射状の舗装パターンが今や虚しく、暗く閉ざされていた。そこで舗装をすべて一新し、森は視線が抜ける高さまで下枝を刈り上げた。また、森に沿ってトンネル状の木陰ができたので、そこに道をつけた。広場の外周にあたるその道を歩く人びとの姿は、メインストリートの活動を広場に呼び寄せる。広場は一体感を保ちつつ、ストリートに建ち並ぶ建築群と森を通じ連続することによって、周辺環境へ解放される。「宮脇の森」が育った今、キャンパスの中心であるこの一帯を水平に広がる印象的な風景に変えることで、豊かな緑を備えた一つの成熟しつつある都市としてキャンパス全体を再定義していこうと考えた。

広場に隣接する講義棟の壁には大きな窓を開けた。中の教室にとっては正面に大きな窓が開くことになるが、もともとこの教室は広場のすり鉢勾配に取り込まれたスロープ床になっていたので、教室にはダイレクトな眺望が生まれ、その体験は教室というよりは劇場である。お昼時に広場を眺め佇んだり、自然を間近に学習したり、広場での催し時に屋内客席として観覧することも想定している。正面に黒板を堂々と据えた強い教室形式を見直し、教える側と学ぶ側の緊張関係に風穴を開けるようなものでもある。講義棟1階は学生の交流や、レクチャー後に招待客とパーティーを開くことを想定したラウンジとし、北・南側に開口をあげ、メインストリートから北側に群生する自然環境へと建物を貫くように開放した。学習のために特別なしつらえをするというより、外部空間と一体となり、誰でも入りやすい環境をつくらうとした。

これまで建物を計画する際、機能という枠組みによって空間の意味が固定されてきたが、その反動で空間は周囲に対し閉ざされた。しかし、それに囚われず、今そこにあるものすべてを一つの環境として捉え、ただ純粋に快適性を見出すことによって、建築物も自然もすべて豊かな環境を担う一部のように捉えることができる。そうして、機能を優先した一辺倒な設計方法では成し得なかった新たな価値観が切り開かれる。このキャンパスにはもはやそれを突破する程の魅力が存在し、そこに更新の意義があった。こうして、建築は群としての価値を築き上げ、より自然なものへ近づく。